

らず、當時所謂西域地方に行はれた漢字音は、多分茲に見ゆるものと同一、もしくは極めて近似のもので有つたであらうから、此の點からもその研究上に一個の指針を與へるものなる事に於て、重要な價値を有するものと見なければならぬ。

此の字音を見て人の注意に値することは少くないと思ふが、此の中の或ものは日本に行はるゝもの、特にその漢音との間に著しい類似を有するのを見出すことなども其の一つであらう。また今音 ing に終る京・兵・英等の文字に對して、それそれ ke, pe, e の音を附し、ang に終る邙・相・囊等に對してそれそれ mo, syo, no 等を附し語尾の ng 音の脱落を示して居る如きも著しい現象である。併しまだ注意すべきことは、此等の ing, ang に終るもののが必ずしも常に e, o に終るのではない。京・兵・英等と同様に ing の語尾を有する明・楹の如きは、それぞれ men, yen の音を有し、邙・相・囊等と同じく ang の語尾を有する康・糠の如きは、共に khañ の音を有してゐる。(ang の語尾を有するものが本邦音では大概 au でありながら、時には ang の語尾を有するものもあると同様である)。切韻・廣韻等の韻書は京・兵・英も明・楹も共に同一の庚韻、もしくは廣韻に之と共用として掲げた清韻に屬し、邙・相・囊も康・糠も共に陽韻、もしくは之と共用の唐韻に屬して居つて、皆同一の韻を有すべき筈であるに係はらず、かく e, o の韻を有するものと、en, an の韻を有するものとの二類に分れ、韻書に於て同一範疇に屬するものが、必しも少くとも此の地方では同一韻を有しなかつた事を示してゐる。其他にも音韻上混亂の存する事は少しく注意して此の字音を見る人には直に看取し得られる事である、かゝる現象は如何に解くべき